

平成十七年の『伊那

谷の文学碑』の出版が

契機となり関連発展事

業が発足して七年が経

過。「文化関係人物事

典」の基礎資料のカー

ド作成が大詰めとなっ

ている。

膨大な資料の中で自

分の担当している俳人

のカード作りをしてい

たある時、一冊の古め

かしい和とじの遺稿集

と出会った。カード化

を忘れ、その中の一人

の青年の姿、生き様に

惹きつけられていた。

名は、森本尚夫、俳

号は「雲歩」。大正五

年、松尾村の森本家の

州平次男にうまれた青

年俳人。

大正十二年松尾小学

校へ、昭和四年飯田中

学へそれぞれ入学。

昭和十三年応召。後

病を得て帰郷、静養の

効なく昭和十四年一月

三十一日弱冠二十四歳

非常時の最中の不便を

しのびつつ夭折した尚

夫の追善の為にと文庫

中を捜し遺稿の全てを

石橋に渡した。

題名「永久に床しく」

は俳句の撰を頼まれた

師、赤雲洞出口叱牛か

ら無二の親友を失って

悲嘆に暮れる門弟石橋

和房への励ましの文、

しい生活、生き様の一

端を語るかに、昭和九

年一月五日から亡くな

る直前の十一月二日ま

での日記の抜粋が四十

四頁に亘って掲載され

ている。

さらに、「病床書簡」

が十頁と続く。

その昭和十二年の日

記の中に、俳友の友と

しての石橋

との関係の

櫻井浩嗣

ことが分か

る記述が。

冒頭にある言葉であ

る。残された四百余の句

から春二十三句、夏三

十一句、秋二十一句、

冬十五句が赤雲洞師に

選ばれ掲載されてい

る。

その後半には、生前

の故尚夫（雲歩）の床

このことから、石橋

と共に赤雲洞に師事し

ていたことを、そして

号の「雲歩」の「雲」

は師との関係を如実に

示すものと考えられ

る。

父州平は、その序で

斯く亡き子の生き方に

言及している。「此の

世の中にひそかに生ま

れ出で、ひそかに生活

して、ひそかに消える

べき、運命をもった児

であったか」と。

遺稿集の扉には、師

赤雲洞叱牛から石橋へ

贈られた絵と言葉が。

そこに描かれているフ

リジャの花は石橋、故

尚夫（雲歩）が共に大

好きであったという。

そして次頁に絶句が

野菊咲いて

雨は湖より

晴れて来ぬ

雲歩

生前、尚夫は東京日

日新聞の「太平洋行進

曲」作詞懸賞募集に応

募し採用され、作曲家

中山晋平が曲をつけビ

クターレコードに吹き

込まれ、全国放送され

た。

そのことの数ヶ月前

朗報を知ることなく尚

夫はこの世を去った。



遺稿集